



ベトナム・うるわし・なつかし

2013年7月4日（木）～ 10月1日（火）
アジアギャラリーA

はじめに—— なつかしの暮らし、うるわしい女性たち

陽光ふりそそぐ穏やかな農村風景、ゆったりとした時間の流れのなかのに佇むアオザイに身を包んだ女性。

フランスの植民地だったベトナムは、美術においても、ヨーロッパの文化の影響を受けながら、独自のスタイルを作り上げてきました。1925年に東南アジア最初の美術学校であるインドシナ美術学校が設立されて以降、ベトナムの作家たちはフランス美術（油彩）を学ぶ一方で、漆や絹などベトナムの伝統的な素材や技法を用いた表現を築き上げてきました。もともとは装飾のための工芸の素材として使われた漆による絵画には、つやつやとした深みがあり、どこか素朴ななつかしさが感じられます。また、絹絵には布に色がしみ込むことでかもし出されるやわらかな風合いがあり、透けるように繊細な色使いのベトナムらしい表現方法のひとつとなりました。

ベトナムの美術では、植民地や戦争の時代をこえて、穏やかな山村、田園風景が描かれてきました。作家たちは自然のなかで家畜とたわむれた子ども時代を思い出し、またそこでの人々の暮らしを温かく見つめています。

もうひとつ、しばしば絵画の題材となってきたのが、女性の姿です。女性たちはアオザイに身を包み、ゆったりと身体を横たえ、そっと首をかしげたうるわしい姿で描かれました。一方、ベトナム戦争中の戦意高揚ポスターに描かれる女性は、武器を持つ逞しい姿ですが、その傍らには常に花が描かれ、うるわしさを失いません。

本展では、ベトナムの近代絵画を中心に当館の所蔵作品と寄託作品をあわせた約 30 点の作品で、なつかしく、うるわしいベトナム美術の魅力を紹介します。



▲ ト・ゴク・ヴァン「美人画を見る女性」
絹本着色 1938年

マイ・トゥ「肘をつく若い娘」
油彩・画布 1936年

ルオン・シュアン・ニー「読書する若い娘」
油彩・画布 1940年

ト・ゴク・ヴァン「二人の女性と幼児」
油彩・画布 1944年

グエン・クアン「西湖（タイ湖）」
油彩・画布 1982年

ファム・ミン・チー「人民に永遠の春をもう一度」
水彩・紙 1975年

チン・フォン「ハノイの少女 アメリカ軍戦闘機を撃墜」
水彩・紙 1972年

穏やかな農村風景・人々の暮らし



ナム・ソン「(村の通り)」
水彩・紙 1958年[個人蔵]

グエン・クアン・ト「(風景)」
水彩・紙 1957年[個人蔵]

グエン・ファン・チャン
「オーアンクワン遊び」絹本着色 1931年
「竹を編む」絹本着色 1960年
「行水」絹本着色 1964年

◀ レ・フォー「ふたりの子ども」
油彩・画布 1932年

タイン・チュオン「田園のかたわらで」
漆・パネル 1999年[Art U-room蔵]

ハー・チ・ヒエウ「牧歌」
油彩・画布 2000年[Art U-room蔵]

チン・クオック・チエン「山村風景」
漆・パネル 1994年[Art U-room蔵]

ダオ・ヒュン「美しく黒き娘」
アクリル、グワッシュ・紙 1993年

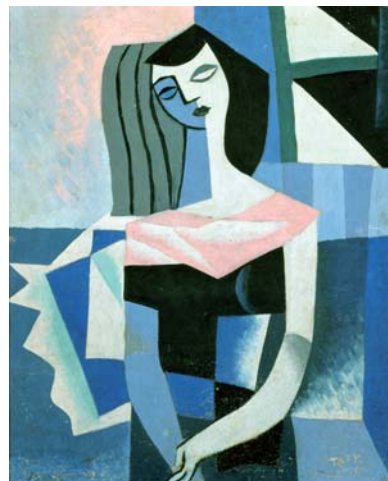
タ・ティは、ベトナム近代美術史からは忘れられていた存在でしたが、近年、再評価が高まっている作家です。ベトナムの近代美術にキュビズムと抽象絵画を最初にもたらした画家であり、都会的なデザイン・センスが光るタ・ティ作品には、なつかしく、うるわしいだけではないベトナム美術のユーモアあふれる側面が感じられます。

タ・ティは、1945年にインドシナ美術学校の最後の学年として卒業します。在学当初はアカデミックな絵画を描いていましたが、次第にピカソやブラック、マティスに関心をもち、1945年以降はキュビズムへと傾倒していきます。「女」や「(ギターを弾く人)」はその頃の作品です。

1954年に第一次インドシナ戦争が終結し、国が南北に分離されると、タ・ティはハノイから南ベトナムへ移り、南ベトナム軍の文化部門を指揮しました。この頃を境に、タ・ティは、キュビズムから抽象絵画へと表現方法を移していきます。「(人物抽象)」はちょうど過渡期の作品です。サイゴンに住んでいた50-70年代にかけて、何度も個展を開いています。

サイゴン時代、タ・ティは、簡潔な線による人物画、風刺画を多く手がけました。特に、友人の美術作家、小説家、ジャーナリストたちの顔を、その特徴を的確に捉えて描き出しています。独特の皮肉とユーモアにあふれた作品からは、起伏の多い人生を歩んだタ・ティの、人を観察する鋭い視線が感じられます。

1975年にベトナム戦争（第二次インドシナ戦争）が終了すると、タ・ティは北ベトナムの再教育キャンプへ送られ、そこで6年もの月日を過ごします。その後、1983年に「ボートピープル」の難民のひとりとして、マレーシア経由でアメリカにわたり、以後20年にわたりカルフォルニアに在住し、抽象絵画を描き続けました。絵画のほかに、小説、詩、脚本などでも活躍した多彩な表現者としての生涯を、2004年ベトナムで閉じました。



▲ タ・ティ「女」 油彩・板 1950年

「(ギターを弾く人)」
油彩・画布 1954年[個人蔵]

「(人物の抽象)」
ポスターカラー・紙 1959年[個人蔵]

「(働く人々)」
水彩、ペン・紙 1960年[個人蔵]

「(男性像)」
ポスターカラー・紙 1960年[個人蔵]

「(二人の女性)」
ポスターカラー・紙 1971年[個人蔵]

「ホーおじさん、村へ行く」

「ホーおじさん」とは、ベトナム建国の父ホー・チ・ミン（1890-1969）のことです。

ホーおじさんは、しばしば人々の暮らしをみるために、村や町に出かけて行きました。手ぬぐいを首にかけた庶民と変わらぬ姿で、米軍物資のタイヤのゴムから作った再生サンダルを履いて村を訪れたホー・チ・ミンは、人々と親しく話を交わしました。こうしたホー・チ・ミンの優しげで飄々とした風貌や高潔な人柄が人々の敬愛を集め、「ホーおじさん（バック・ホー）」と呼ばれ親しまれてきたのです。そして、その姿がベトナム近代絵画においてもしばしば描かれてきました。それぞれの作品に描かれるホーおじさんの表情や、まわりの人々との関係にも注目してご覧ください。



▲ グエン・カン「ホーおじさん、村へ行く」 漆・板、1958年

ファム・ヴァン・ドン「ホーおじさん、村へ行く」
木版・紙、1972年

グエン・バン・ドン「(ホーおじさん)」
漆・板、制作年不詳[個人蔵]

ベトナムの版画

ベトナムの民衆版画とは、厄除けや招福を祈願して、旧正月の飾り絵として、家の門や部屋に毎年新しく飾られてきたものです。現在の首都ハノイ市で作られてきた「ハンチョン版画」やハノイの近郊のドンホー村で作られてきた「ドンホー版画」があり、これらは木版の下刷りの上に、多色刷りまたは手彩色で色をつけたものです。民衆版画の題材には、人々の生活や民族的な英雄、自然、風刺・皮肉をあらわすものなどが描かれてきました。ファム・ヴァン・ドンやトー・ジエンなどの版画家たちも、こうした子沢山の豚やチュン姉妹などの民衆版画の題材をしばしば描きました。



▲ 作家不詳(ハンチョン版画)
「五虎図」
木版、彩色・紙 制作年不詳

トー・ジエン
「(子沢山の豚)」
版画、手彩色・布 1967年頃
[個人蔵]

ファム・ヴァン・ドン
「チュン姉妹と進め」
木版・紙 1970年